九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

菱形文様と生活のかかわりに関する研究 2 : シルクロードに展開する使用事例を中心として

石村, 真一
九州大学大学院芸術工学研究院人間生活システム部門

https://doi.org/10.15017/2928814

出版情報：芸術工学研究. 1, pp.21-43, 2004-03-12. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

研究ノート

菱形文様と生活のかかわりに関する研究－２
－シルクロードに展開する使用事例を中心として－

Study on Rhombic Patterns and their Relation with Cultural Lifestyles－2
－Study Case focusing on Rhombic Patterns developed in the Silk Road－

石村真一
ISHIMURA Shinnichi

This paper aims to examine the relationship between rhombic patterns and cultural lifestyles developed along the Silk Road as a study case. The following became clear after an analysis was made based on the survey's data:

1)Even though the rhombic pattern's use rate is overwhelmingly superior in China, it is possible to observe a smaller number of them in Central Asia, West Asia and Bulgaria.

2)The rhombic pattern's application is mainly observed in the surfaces of house's facades as well as of doors. In China, it also extends to everyday life articles' designs.

3)Various techniques to shape rhombic patterns exist. From these, the "synthetic stone washout finish" one became widely popular from 1970 on, and it can be found in regions ranging from China to Bulgaria.

4)The rhombic patterns' chained compositions were used in China from the Qing Dynasty on. However, a detailed argumentation concerning the rhombic patterns' origins will be made in a future task. Moreover, concerning to the angled corner compositions, they have been detected in China, Uzbekistan and Iran. It is clear, therefore, that such design is not found only in China.

5)The relationship between rhombic patterns and cultural lifestyles does not have a particular defined purpose. They were decided inside the communities' gatherings where the families and the construction workers would meet up to talk about their regional customs, traditions as well as recent years' trends. By making use of this rhombic patterns, the Chinese public facilities intentionally denote their national identity.

１．はじめに

菱形文様の住宅正面部分における使用については，『芸術工学研究No. ４』に，中国の中南部，ベトナム，ネパール，日本を事例として発表した［注１］。本論は菱形文様と生活のかかわり関する第２報で，シルクロードに展開する菱形文様を，住宅正面の装飾，公共機関の玄関や門を中心に事例を収集し，菱形文様の持つ意味に地域差があるかどうかを検証することを目的とする。

『芸術工学研究No. ４』では，中国には明・清代より三連菱，三連環という文様が既に意匠として発達しており，その延長上に中国の中南部の住宅で現在見られる菱形文様が位置すると規定した。さらに菱形文様は，隅入角という別の意匠と連動する面も多く，複数の意匠のセットとして捉える必要性があることを提示した。また菱形文様は日本においても人造石洗い出しという技法によって，現在も各地で使用されていることから，モルタルの技法として東アジアに菱形文様が広く使用された可能性があることを示唆した。

本論においては，特に人造石洗い出しによる菱形文様に着目しながら，中国の洛陽からブルガリアまでのシルクロードと呼ばれる地域の事例を通して，菱形文様の展開について考察する。

２．研究の方法と調査地域

研究の方法は，まず最初にフィールド調査によって菱形文様の事例を抽出し，その内容と技法を人造石洗い出し，ペイント，レリーフといった技法と，文様の意匠面から類型化する。次に類型化された資料を比較し，シルクロードにおける菱形文様の発達過程を導き出す。

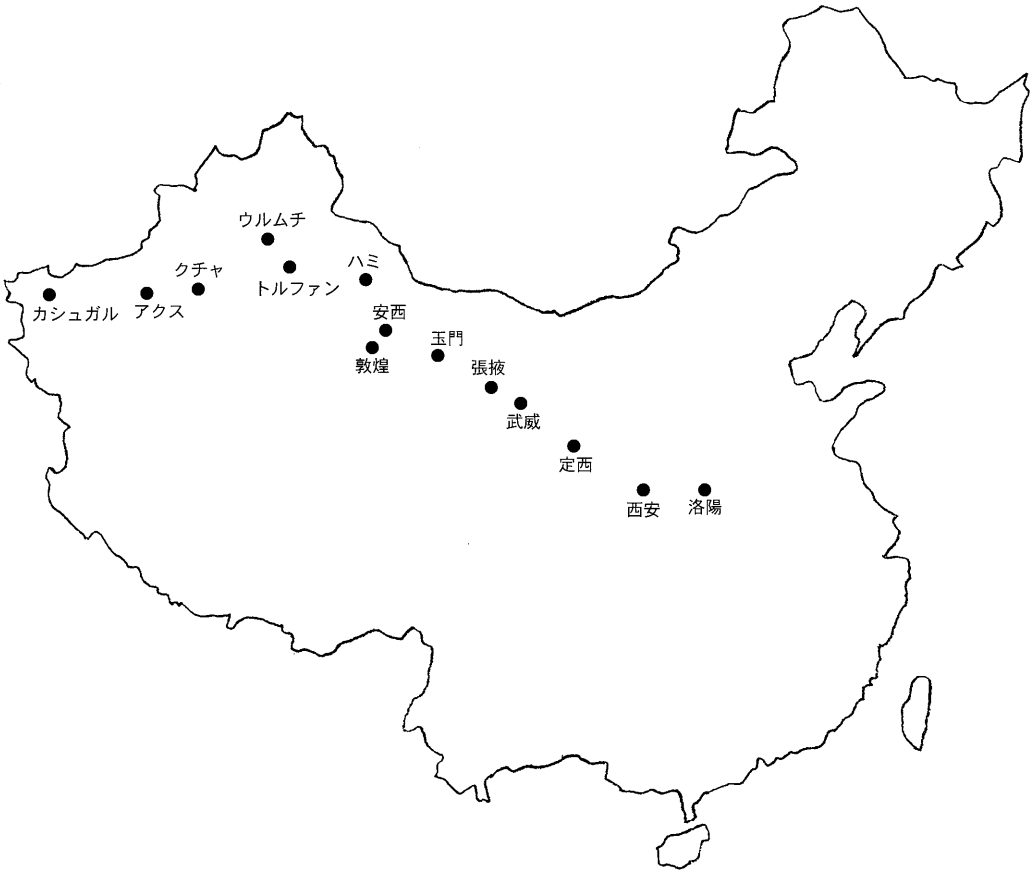

図１　中華人民共和国の調査地

調査地域は，中国の西安から新彊ウイグル自治区のカシュガルまでの天山南路北道，カザフスタンのアルマトイからキルギスタン，ウズベキスタンを通過する天山北路、さらにウズベキスタンからトルクメンスタン，イラン，トルコを経てブルガリア東部に達するシルクロード地域である。

移動はすべて専用車によるもので，幹線道路沿いの民家，市街地の民家を中心に，公共機関の玄関や門扉も一部調査の対象とした。

洛陽市から西安市にかけての調査は2004（平成16）年１月，西安市から新彊ウイグル地区にかけての調査は2001（平成13）年８～９月，カザフスタンからブルガリアにかけての調査は2003（平成15）年８～９月に実施した。

３．天山南路の北道に関する調査

天山南路の北道は図１に示したもので，敦煌市からカシュガル市までの道が実質的な北道である。

3.1. 河南省，陝西省における菱形文様

シルクロードの起点となった河南省洛陽市では，中心地区の住宅地に菱形文様を見いだすことはできなかった。上海市内の住宅地で展開していたタイルによって菱形文様を成形する技法もなく，近代住宅に菱形文様は取り入れられてはいない。

しかしながら，郊外の農村では写真１に示したように，人造石洗い出しによる三連菱が散見された。この家では鉄製の門扉にも三連菱が施されており，菱形文様が多用されている。写真１の人造石洗い出しは，煉瓦の上に加工されたものである。菱形文様は煉瓦の上に直接施されることはない。河南省西部では，農村部の住宅に写真１のような人造石洗い出しによる三連菱が広く普及している。但し，1970～1980年代に流行したが，近年建てられた家に施されることは極めて希である。菱形文様の持つ意味は，特別見当たらない。聞き取り調査では，すべて装飾の一つとして取り入れているという極めて曖昧な意見が述べられるだけで，宗教的な要素を見いだすことはできなかった。

陝西省の東部でも菱形文様は近代建築の玄関には施されておらず，写真２に示したように，殆どが農村部で展開されている。成形技法は人造石洗い出しが定番となっている。写真２の家は1980年代に建造され，玄関上の屋根に菱形以外の装飾を加えている。

写真３は西安市内の高層ホテル内の扉脇に施された菱形文様である。扉の表面に，木材でレリーフ状に菱形を接着している。写真２と写真３は共に菱形文様を使用しているが，写真３は写真２に比較して連菱といった伝統的な装飾要素が少ない。それでも住宅の玄関と同じように，部屋のドア付近に何等かの印象を与える役割を果たしていることは共通している。

写真４は西安市の郊外で見られたもので，玄関上部の煉瓦に直接菱形を彫り込んでいる。こうした煉瓦を加工した事例は極めて珍しい。写真４の居住者は元々ヤオトン［注２］で生活しており，近隣の住宅においてもモルタルによる加飾性は少ない。写真４の技法が人造石洗い出しによって菱形を成形する以前の方法と断定することはできないが，モルタル壁を使用しない煉瓦建築に菱形文様が使用されていることは，菱形文様の起源を考える上で重要な手掛かりとなる。写真４の生活者からの聞き取りでは，菱形は四方への発展を意味するという見解が示された。こうした認識は個人的なものかもしれないが，四方への広がりを示すという指摘は的を射ている。

3.2. 甘粛省における菱形文様

甘粛省東部の定西地区では，写真５のような人造石洗い出しによる菱形文様が農家の腰壁に認められた。三連菱を立体化にしたような意匠は『芸術工学研究No. ４』でも紹介したように［注３］，上海市で見られたものと強い類似性がある。写真５の住宅も煉瓦造であり，煉瓦の上にモルタルを上塗りし，仕上げ面に人造石洗い出しを用いている。煉瓦造住宅自体の歴史は古いが，酸化焼成による赤煉瓦の普及はそれほど古くはない。1970年代以降に中国政府がホフマン窯［注４］の建設を全国で奨励したため，赤煉瓦が安価となり，農村住宅でも積極的に使用されるようになった。逆に赤煉瓦の普及で土壁の住宅が激減するようになり，伝統的な建築様式が衰退する原因ともなった。

甘粛省は東西に細長く，先の定西地区は典型的な黄土高原地帯である。甘粛省の中央部は武威市あたりで，武威市より西部は砂漠が急激に増える。武威市とその郊外で見かけた菱形文様は写真６～９に示したものである。

写真６は明・清時代の遺跡に近年設置されたブロック製のフェンスである。おそらくこのブロックは既製品であろう。三連環と三連菱をレリーフで表現している。こうした連環や連菱は，地域性とは関係なく，中国の伝統文化を示す典型的な装飾として，現在も各地で生産されている。

写真７は農家の腰壁に人造石洗い出しによって施した三連菱である。隅入角の中に三連菱を配した典型的な複合意匠で，写真５の様式に強い類似性を感じる。

写真８は農家の門に施された菱形で，伝統的な連菱ではない。人造石洗い出しによる加飾ではなく，単にモルタルに溝を付け，白色の顔料を埋めたという単純な技法で成立している。おそらく家主の仕事であろう。

写真９は集合住宅に施された人造石洗い出しによる菱形である。1980年前後に建造されたもので，当時は集合住宅にも人造石洗い出しによる装飾が浸透していたということになる。武威市とその郊外も古い歴史を持つ地域ではあるが，中国共産党の政権になって新たに開拓され，他地域から移住した人達も多い。写真７，９の意匠も他地域と共通性があり，地域固有のものというようりは，むしろ甘粛省以東の住宅に見られる装飾性と関連していると規定すべきである。

武威市から西に進むと，徐々に漢民族の人口が少なくなり，ウイグル族や回族等の人口が多くなる。写真10は武威市から200～300km西方に位置する張掖市郊外の農家に施された三連菱と三連環である。この場合の三連菱，三連環は伝統様式の追従というよりは，伝統的な文様を参考にしながら，より自由に装飾を施したように感じる。モルタルの掻き落としという技法を使用していることから，プロの左官職の仕事というより，家主の趣味的な仕事のような印象を受ける。住人は漢民族であっても，地域性のためか写真11［注５］に見られるような漢民族の伝統的な装飾様式とは質が異なる。

張掖市からさらに西へ進むと酒泉市の広大な行政地となる［注６］。酒泉市の東に位置する玉門市では，写真12のような菱形文様を含むカラフルな門扉に出会った。連菱の意匠は含むが，写真12は意匠全体の構成と色彩は漢民族のものではない。いわゆる少数民族と呼ばれるウイグル族，キルギス族，回族等の嗜好が写真12には強く反映している。

写真13は敦煌市の東150kmに位置する酒泉市安西の映画館である。門扉や柵，映画館の正面上部に鉄の三連菱がシンメトリックに飾られている。映画館は公共機関であり，三連菱は公共を意識した意匠ということになろう。安西に生活する住民の殆どが，1950年代以降に黄土高原以東より移住した人達で，いわば共産党政権によって築かれた町といっても過言ではない。ウイグル人等の地域支配を排除するために，漢民族をわざわざ国策で移動さ

せたのである。そうした町の公共施設に漢民族の伝統的な菱形文様を多用している。どうも国家的な民族支配政策に，菱形の意匠が意図的に使用されているように思えてならない。

写真14は敦煌市郊外で見かけたウイグル族の農家で，煉瓦の上に漆喰を塗り，その上に三連環，三連菱，立方体等を描いている。こうした鮮やかな彩色技法は，西域の壁画を連想させる。漢民族の伝統文様を一部用いても，色彩感覚は西域特有なものになっている。

写真15，16は敦煌市内で見かけた菱形である。安西同様，敦煌市も1950年代以降の国家政策で人口が増えた町で，少数民族と漢民族の文化が混在している地域となっている。写真15は漢民族の社会で見かける人造石洗い出しによるもので，逆に写真16は同じ人造石洗い出しの技法を使用しても，少数民族の感性が強く反映されている。図16は医療機関のようで，看板の文字も漢字とウイグル文字の２種類が認められる。甘粛省西部は完全な西域なのである。少し気になるのは，玄関の門扉上に施された隅入角という意匠の位置づけで、これまで中国の漢民族特有の意匠と規定していたが，中国西部でも広く使用されているため，中国独自の意匠として規定することは危険である。

写真17～19は敦煌市郊外の農村で見かけた玄関である。この村はオアシスを活用した漢民族による開拓村であり，1970代に形成されている。写真17，18は共に人造石洗い出しによるもので，1980年前後に施行されている。写真17，18の意匠は，敦煌市郊外という地域性と殆ど関係ない。政府の漢民族移住政策によって集められた開拓団の出身地は実に広範で，聞き取り調査でも河南省以東からの移住者もいた。つまり，写真17，18の意匠は漢民族の生活地域から導入されたものと規定することができる。ところが，1980年代に流行した図17，18の人造石洗い出しによる装飾様式から，近年は図19に示した絵タイルによる装飾に移行している。こうした住宅における装飾方法の変化は，漢民族における生活様式の移行を単に追従したものといえよう。

3.3. 新彊ウイグル自治区における菱形文様

敦煌市から約200kmで新彊ウイグル自治区に入る。砂漠に時折オアシスがあるといった風景が延々と続く。最初の調査はハミ市［注７］で行った。写真20はその時見かけた菱形である。農村部の小学校の門柱に施されたもので，三連菱になっている。さらに門横の塀に隅入角が認められ，伝統的な装飾の構成になっている。写真20の小学校は漢民族の開拓村の中にあるが，そうした民族意識が三連菱の背景にあるのではなく，公共物には漢民族の伝統的な意匠を意図的に配したと読み取りたい。

写真21もハミ市で見かけた菱形文様で，連環と連菱をモチーフとし，シンメトリックに表現している。連環の数が５になっているところに特徴がある。装飾技法は実に稚拙で，漢民族の伝統的な装飾様式を参考にしてはいるが，かなり自由に表現している。腰壁にはウイグル文字が見られることから，住人はウイグル人であろう。

写真22，23はトルファン市で見かけた菱形による装飾である。写真22は市街地の建築に張られたタイルで，連菱と雷文で構成されている。このタイル自体はトルファン市で生産されたものではない。連菱，雷文そのものは中国文化を特徴づける文様であるのに，何故か西域的なイメージを感じさせる連続パターンになっている。

写真23はホテルの玄関に施された装飾で，唐草，隅入角，菱形といった文様で構成されている。さらにイスラム建築のアーチを連想させる形を組み合わせている。色彩も含め，極めて中国西方をイメージさせる装飾となっている。トルファン市の観光客用ホテルという目的もあって，イスラム的なムードを醸すというコンセプトが装飾にあったことは事実であろうが，菱形文様も使い方でイスラム風［注８］の演出が可能となる。

写真24，25は共にウルムチ郊外の国道に面して建てられた店舗兼用住宅である。写真24は三連環，三連菱を基盤とし，ダイヤモンドを模した形を加えている。こうした組み合わせは上海の住宅建築でも見られ［注９］，この地域のオリジナルではない。写真25は三連菱に三菱、四菱が加えられている。特に大きさと角度の異なる２種類の菱形を組み合わせた四菱の意匠は，写真24のダイヤモンドと同様に上海でもよく見かける［注10］。写真24，25の居住者は漢民族であってウイグル族ではない。写真25の看板にも四川という文字を記しているように，ロードサイドショップとしての食堂には，漢民族を対象としたものと，少数民族を対象としたものがある。おそらく写真24，25に見られる装飾は，漢民族用の食堂を示すことも目的にあったと推察される。それも上海のような都会的なフィーリングを醸し出したいため，1970～1980年あたりの建造物では，人造石洗い出しの技法を上海風に使用したかったのではなかろうか。ロードサイドの文化は極めて早い時間で他地域の情報を伝える。また生活者も遠方から一攫千金を夢見て移住してきており，新彊ウ

イグル自治区の幹線道路沿いは，文化の坩堝といった様相を呈している。

写真26はクチャ市で見かけた連菱を施したゴミ箱である。公共性の高い場所・モノに連菱（二連菱，三連菱）の装飾を施す割合は予想以上に多い。

写真27～29は新彊ウイグル自治区の西部に位置するアクス市の調査で見かけた菱形である。写真27の菱形はホテルの駐車場で停めてあった自動車に施しているもので，公安関係の公用車である。菱形文様自体はアクス市と直接関係ないかもしれないが，新彊ウイグル自治区の公安だからこそ，意図的に漢民族の伝統的な三連菱を用いたと考えられる。他の省でこのような装飾を公安が用いた事例は，管見の限り見当たらない。

写真28は市内の食堂で見かけた容器である。菱形文様は日常の生活品にも使用されており，使用者も特に文様に拘っているようでもない。

写真29，30は国道沿いで稼働するロードサイドショップで，写真29は1980年前後，写真30は近年建てられたものである。人造石洗い出しによる菱形から，タイルによる菱形に嗜好が移行している。写真29から30への展開は，上海における動向と概ね等しい。

写真31はイスラム教の小さな教会で見かけた菱形文様である。木製ドアの鏡板にレリーフ状に板を張り付けており，連菱の意匠とは雰囲気が異なる。このような木製ドアに施した菱形はウイグル族の住宅に散見される。

写真32～37は新彊ウイグル自治区の西端に位置するカシュガル市で見かけた菱形文様である。アクス市以西においてはウイグル族が圧倒的に多数を占め，漢民族は国道沿いの店舗や市の中心部で商業を営んでいる程度で，漢民族の割合が多いウルムチあたりの文化とは質が異なる。カシュガル市は古来より交通の要衝として知られ，シルクロードの分岐点となっている。

写真32～34は共に隅入角と菱形を組み合わせた意匠を展開している。写真32は三連菱をモティーフとしているが，菱形を大きくとったレイアウトと配色に西域の地域性を感じる。写真33は先の写真31と共通性がある。しかしながら，隅入角と菱形に段差をつけ，二段のレリーフとなった極めて複雑な構造にしている。写真34は屋台に菱形が施されている。隅入角が直線的なものに変形されてはいるが，基本的には写真33と似た発想で構成されている。写真32～34を見る限り，菱形文様はウイグル族の生活にも深く根ざしていることが理解できる。但し，隅入角はイスラム文化でも長く共有していた文様であったとしても，三連菱は漢民族の意匠を取り入れた可能性が高く，二つの文様を同一に取り扱うことは危険である。

写真35～37はカシュガル市とその郊外の学校に施された菱形文様である。写真35は隅入角と三連菱をモティーフとしている。人造石洗い出しの技法は使用しても，文様は溝状にしただけのシンプルなものとなっている。写真36は近年建てられた校舎で，鉄柵には三連菱と三連環という伝統的な文様を丁寧に模している。写真37は先のアクスの事例で示した写真30と同じタイプの装飾である。カシュガル市という中国の最西端の町で，学校建築に三連菱，三連環といった漢民族の伝統的な意匠が展開していることは意外であった。これまでも甘粛省や新彊ウイグル自治区の公共施設に関する装飾でも繰り返し述べてきたように，少数民族の生活地域に対しては，装飾の文様も，現在の中国政府が進める民族政策［注11］の重要ポイントなのである。

4．中央アジアに関する調査

4.1.天山北路に関する調査

中国の新彊ウイグル自治区ウルムチ市から北上し，カザフスタンからウズベキスタンに通じる交易路はシルクロードの天山北路と呼ばれることから，今回の調査ではカザフスタンからウズベキスタンのフェルガナまでを天山北路と規定した。天山北路からヨーロッパの東端に位置するブルガリアまでの行程は図２に示した。

4.1.1.カザフスタンにおける菱形文様

2003年８月～９月にかけては，SARSの影響でウルムチ市からカザフスタンに入国することが難しかったため，ウズベキスタンのタシケント市から空路でカザフスタンのアルマトゥイ市に入った。旧ソビエト連邦時代に行われた都市計画は，道路の幅が広く，街全体がヨーロッパ風のイメージを醸し出している。カザフスタン全体でロシア人の占める割合は30パーセントと高く，特に近年まで首都であったアルマトゥイ市内は，ロシア人の占める割合が高い。

アルマトゥイ市内の中心部では，菱形文様を住宅正面に配した事例は見当たらなかった。写真38，39はキルギスタンの国境に近いゲオルギエフカ近郊で見かけた菱形文様である。写真38は板の柵表面にペイントで菱形を塗り残したもので，同様の意匠はキルギスタン東部にも普及していることから，カザフスタン特有の表現とは言い難い。

図２　中央アジア・西アジア・ブルガリアの調査地

写真39の菱形は住宅の四隅に施され，上下に三角形と菱形を組み合わせた形態がセット化されている。菱形を住宅の四隅に配した意匠は，これまでの中国調査では一切認められなかった。このことから建造物の中央に配する中国の三連菱とは使用する意図に差異があるということになる。しかしながら，菱形の形態が持つ４方向へのこだわりについては共有している可能性が高い。

4.1.2.キルギスタンにおける菱形文様

ゲオルギエフカから41号線を西進してキルギスタンに入る。写真40～42はキルギスタンの首都であるビシュケク郊外で見かけた菱形文様である。先の写真38，39の地点とは100km程度しか離れていない。写真40は人造石洗い出しによって，菱形を住宅の四隅、軒下に配している。つまり菱形は左右と上の３方向に施されていることになる。

写真41はモルタルの技法ではなく，土壁の上に漆喰を用いて菱形を成形したものである。掻き落としの技法を一部用いているかもしれないが，漆喰を塗った部分に高さの異なる箇所があるため，すべて漆喰の掻き落としによって成形されているとは限らない。

写真42は先の写真38と意匠が類似している。柵に使用している板をレリーフ状に配して菱形を成形している。こうした板柵に菱形文様を配するという嗜好はキルギスタンの中部でも認められた。

写真39～41は技法が異なるものの，四隅に菱形を縦状に配するという構成は共通しており，菱形以外の文様を四隅に配した事例は管見の限り見当たらない。

写真43はキルギスタン中部のトクトグルあたりで見かけたもので，人造石洗い出しによって菱形を成形している。この建物は調査時には使われていなかったが，元々住宅として建てられたものではない。すなわち，写真43の菱形は商業建築の装飾効果の一環として施されたものといえよう。似たような使用方法はネパールの調査でも数例認められた［注12］。

写真44はウズベキスタンのフェルガナ盆地に近いオシ市郊外で見かけた菱形である。モルタルをレリーフ状に加工し，その上をペイントしている。この建物は伝統的な住宅ではなく，菱形文様を施している部分はガレージに利用されている。同じ住宅に使用した菱形であっても，

先の写真39～41の四隅に配した菱形と写真44の菱形はやや質が異なる。

4.1.3.ウズベキスタン東部における菱形文様

フェルガナ盆地の中心都市はコーカンド市で，現在はウズベキスタンの一地域であるが，19世紀には一つの国家の首都であった。フェルガナ盆地は天山南路のカシュガルと同様に，東西文化の接点として長く栄えた地域である。

写真45，46は共にフェルガナ市郊外で見かけたものである。写真45はワイン工場の事務所に施された菱形で，人造石洗い出しによって成形している。事務所が1970年代に建てられており，人造石洗い出しというモルタルの技法が流行し，その加飾法の一つとして菱形が使用されたようである。聞き取り調査からは菱形の使用に関する明確な回答は得られなかった。

写真46も写真45と同じ人造石洗い出しによって菱形を成形している。製作された年代も同じで，単純な構成で菱形文様を扱っている。

4.2.中央アジア西部に関する調査

天山北路，南路といった地域観は，中国の西域を中心にシルクロードを規定したものといえよう。ウズベキスタン東部のフェルガナ以西に関しては，単にシルクロード沿いのオアシス都市として記述され，北路とか南路といった特定の呼称で規定することができない。本論ではソビエト連邦時代に灌漑が進み，オアシス都市と規定することが出来ないことから，過去のシルクロード沿いの地域を中央アジア西部として扱う。

写真47はウズベキスタンの首都であるタシケント市で見かけた菱形文様である。この菱形は住宅正面に配されているものではなく，側面の道路に面した部分に施されている。壁面は老朽化しているが，人造石洗い出しによって菱形を成形している。タシケント市では少数の事例を見かけた程度で，菱形文様は普及していない。

写真48，49はタシケント市とサマルカンド市の間に位置するシザフで見かけた菱形文様である。シザフからサマルカンドにかけては，道路沿いの住宅に人造石洗い出しによる壁面装飾が目立つ。写真48，49共に住宅の側面に菱形を施しており，人造石の色が少し紫を帯びているところに特徴がある。

写真50，51はサマルカンド市郊外で見かけた菱形文様である。写真50は集団農場内の住宅で，完全な木造の構造となっている。その腰板部分に木材でレリーフ状に木材を張り付け，菱形を成形している。居住者の話では単なる装飾ということで，特段文様に意味付けが成されているわけではない。

写真51は人造石洗い出しによるもので，菱形を重ねた意匠を用いている。中国で使用される連菱と似た菱形の構成になっている。また菱形文様の外側に隅入角がシンメトリックに配され，こうした菱形と隅入角をセットにした構成も中国と共通していている。写真51の住宅は近年建てられたか，改装されたものであることから，人造石洗い出しの技法が現在まで継承されていることになる。サマルカンド市郊外では人造石洗い出しが現在も流行しているようで，菱形のような直線形状だけでなく，曲線の多い複雑な形態も認められる。

写真52はシャーリサブス市で見かけた19世紀の建築に施された菱形文様である。木製の羽目格子に菱形を配した意匠は珍しく，イスラム文化で長く継承された複雑な木組みを用いた格子の意匠と連動して成立した可能性が高い。写真51のようなモルタル壁の表面に施した菱形文様以前に，写真52のような木材による菱形の意匠が煉瓦構造の大規模建築に展開していたことは実に興味深い。

写真53～55はブハラ市の調査で見かけた菱形文様である。木材をレリーフ状に施した写真53の意匠は，中国の新彊ウイグル自治区西部のアクス市，カシュガル市で見かけた写真31，33，34と共通性が感じられる。

写真54，55は共に人造石洗い出しによって成形された菱形文様である。玄関周辺には菱形を配さず，道路に面した住宅部分だけに用いている。写真54は隅入角と菱形がセットになっており，また写真55は菱形を縦に構成した三連菱になっていることから，中国の意匠と共通性を感じさせる。

トルクメンスタンでは，チャルジェフ市，マリー市，アシガバード市で調査を行ったが，菱形文様の使用例を見いだすことはできなかった。換言すれば，トルクメンスタンの住宅では菱形文様を使用していたとしても，普及率が極めて低いということになる。同じイスラム文化圏，旧ソビエト連邦の構成国家であっても，文様に対する意識は決して均質ではない。

5．西アジアに関する調査

シルクロード調査では，イランとトルコの二カ国で調査を行った。

5.1. イランにおける菱形文様

トルクメンスタンの首都であるアシガバードからコッペ山脈を経由してイラン国内に入った。国境から20～30㎞に位置する小さな集落で見つけたのが写真56，57の菱形文様である。これらの門扉はすべて鉄製で，鉄板の上に薄い鉄板を溶接して菱形を成形し，その後にペイントしている。人口が100人にも満たない集落の約半数は菱形文様をドアに施していた。集落には溶接加工をする職人はいないことから，近隣の町に注文しているのであろう。不思議なことに，小さな集落でも同じ意匠の菱形は存在しない。

写真58，59はイラン第二の都市であるマシュハド市郊外で見かけた菱形文様である。どちらも農家の門扉であり，写真56，57同様に鉄製で，写真58は金色に鍍金している。また写真59はペイントによって着色している。こうした鉄製のドア以前は木製であったと思われるが，調査では木製の本格的な門扉を見つけることはできなかった。写真58，59における菱形の意匠は実にシンプルなもので，イスラム文化特有の唐草文様は何故か用いられない。

写真60はカスピ海に面したサーリー市で見かけたもので，鉄製の門扉に隅入角と菱形を配している。この隅入角は曲率が大きく，中国で使用される形態とは少し印象が異なる。しかしながら，ウズベキスタンの写真51，54でも触れたように，隅入角と菱形をセット化して一つの意匠に展開しているところに着目しなければならない。中国が先か，中央アジア，西アジアが先かというルーツ論は別としても，極めて類似性が高い意匠が似たような目的で使用されている以上，隅入角と菱形の取り合わせを，中国文化で形成された意匠と断定することはできない。

写真61～63はイラン西部のタブリーズ市の調査で見かけた菱形文様である。写真61はモダンな建築壁面に，タイルの組み合わせで菱形を成形した珍しい事例である。タイルによる使用例は中国に散見されるが［注13］，カザフスタン以西では初見事例になる。写真61の建物が純粋な個人住宅である確証はないが，住宅地に位置し，看板類も設置されていないことから，商業目的の建造物ではない可能性が高い。仮に個人住宅ではなくとも，やや富裕な生活層に菱形文様を受け入れる素地があることは注目される。

写真62は写真56，57，58，59，60と同系統の意匠であり，門扉の素材も同じ鉄である。極めて鮮やかな色彩をペイントしており，中国のウイグル族の色彩感と共通性を感じる。

写真63はタブリーズの住宅街で見かけた菱形文様で，人造石洗い出しによって成形している。イランの調査では人造石洗い出しの技法を使用した住宅そのものが少なく，菱形を施した意匠も使用例は写真63しか確認できなかった。しかしながら，中国や中央アジアのキルギスタン，ウズベキスタン同様，1970～1980年代にはイランでも少数ではあるが，人造石洗い出しによる菱形文様が展開されていたことは事実である。

5.2. トルコにおける菱形文様

タブリーズ市からマークーを経てトルコに入る。国境越えて最初に訪れたドゥバヤズットは，住民の大半がクルド族である。近郊の農村ではモルタル壁が殆ど見られず，当然人造石洗い出しの壁も見当たらない。アルメニアとの国境に近いトルコ東端の幹線道路を北進すると，カルスあたりから町の商店の正面上部に，小さな菱形文様が見られる。

写真64，65は，カルスから更に100㎞程北に位置するアルダハンの商店である。似たような大きさの菱形が同じ様な位置につけられている。レリーフ状にしたものやペイントを施したもの等，成形方法は一様ではないが，規格化したようにどの商店でも見られる。聞き取り調査では，単に伝統的な装飾という答えが返ってくるだけで，具体的な目的は確認できなかった。写真64，65に示した菱形文様は，黒海に近いアルトウィン市では殆ど見かけない。菱形文様は一つの伝承として，150㎞程の距離に点在する小都市の商店でだけに展開していることから，特定の地域に限られた習慣といえよう。

写真66はアルトウィン市の住宅内で見つけた菱形のレリーフが扉に施された家具である。住宅の壁面やドアに見られる菱形の目的と同一視出来ないが，装飾という点では一部似た要素を共有している。カルス，アルダハンといった菱形文様を商業施設で多用する地域と隣接する地域であるアルトウィン市だからこそ，写真66のような装飾が伝承され，生活に受け入れられていると読み取ることも可能である。

トルコの調査は，その後黒海沿岸のトラブゾン，シノップで実施し，その後また内陸に入り，サフランボルからイスタンブール，最後にボスボラス海峡を渡り，エディルネと進めた。結果的にはアルトウィン市以西の調査では，住宅等に菱形文様を施した具体的な事例を確認す

ることはできなかった。イランで見られたような，鉄製の門扉に菱形を施すといった生活習慣は，クルド族，トルコ族共に認められないことから，菱形文様の使用はイスラム文化圏という枠だけで規定できない生活文化ということになる。

6．ブルガリアに関する調査

シルクロードの調査は，通常起点をイタリアのローマ市，中国の洛陽市または西安市とする。今回の調査ではイスタンブールからギリシアへ向かわず，エディルネからブルガリアに入り，スビレングラード，ハスコバを経てソフィアに至るというコースを設定した。このコースをシルクロードのメインコースと規定することもできないが，一概に否定することもできない。イスタンブール以西は陸路でも，海路でも可能であり，比較的古い生活様式が残っているブルガリアも一つの選択肢と考えたからである。

ブルガリアで確認出来た菱形文様は，写真67に示したように，門柱に施した一例だけである。この技法は人造石洗い出しによるもので，1990年代に施工されている。ブルガリアはトルコに比較して，人造石洗い出しの普及がやや高いように感じた。ところが，菱形文様を意匠に用いた例は，写真67しか見つけだすことはできなかった。それでもウズベキスタンの事例に近い人造石洗い出しによる菱形文様を確認出来たことは，同一材料による類似性のある意匠の展開を考える上で，貴重な資料を提示できたように思える。

7．考察およびまとめ

広大な地域を幹線道路沿いに一人で調査するといった手法は，調査の精度という点では甚だ低いという指摘もあろう。但し，現実的には16,000km以上の距離を多人数で長期間調査することは極めて難しい。一人の人間が持つ菱形文様にかかわる印象を，事例の比較を通して少しでも客観化した資料として提示し，考察を加える。

7.1.菱形文様の使用率

調査全体の印象から，菱形の国別使用率を次のように順位付けた。

①中国，②イラン，③ウズベキスタン，④キルギスタン，⑤トルコ，⑥カザフスタン，⑦ブルガリア，⑧トルクメンスタン

上記の中で中国の使用率は突出しており，シルクロード沿いの公共施設に関しては100パーセント使用していると言っても過言ではない。

7.2.菱形文様の成形に関する技法別分類

1）人造石洗い出し（26）
写真１，写真２，写真５，写真７，写真９，写真15，写真16，写真17，写真18，写真20，写真24，写真25，写真29，写真35，写真40，写真43，写真45，写真46，写真47，写真48，写真49，写真51，写真54，写真55，写真63，写真67

2）木材によるレリーフ（11）
写真３，写真23，写真31，写真33，写真34，写真42，写真50，写真53，写真64，写真65，写真66

3）鉄によるレリーフ（８）
写真13，写真36，写真56，写真57，写真58，写真59，写真60，写真62

4）モルタル・煉瓦によるレリーフ（５）
写真４，写真６，写真８，写真10，写真44

5）プラスチックによるレリーフ（１）
写真28

6）ガラス表面にシールを貼る（１）
写真27

7）漆喰（１）
写真41

8）ペイントのみ（７）
写真12，写真14，写真21，写真26，写真32，写真38，写真39

9）タイル（４）
写真22，写真30，写真37，写真61

10）木組み
写真52（１）

素材・技法を通した分類では，人造石洗い出しが最も多い。しかしながら，製作された年代が1970年代以降であり，1950年代に遡る事例は見出せなかった。人造石洗い出しという技法自体は，日本でも第二次大戦以前から普及していることから，中国に限って見た場合，1970年あたりから普及した新しい技法ということになる。

人造石洗い出しと菱形の意匠については，中国と中央アジアの共通性だけでなく，ブルガリアの写真67と写真68に示した日本の意匠にも共通性が認められる。すなわち，人造石洗い出しによる菱形文様の使用はアジアの東端にまで達したということになる。

鉄材による成形は溶接技術の普及が前提となっており，

農村部の門扉に鉄材が使用されるのは早くとも第二次大戦後である。実態としてはやはり1970年以降に普及したと推察される。

木材を使用した事例は玄関ドアが最も多く、鉄製ドアと同様に，ペイントによる着色が意匠に深く関与している。仮に木材のレリーフが第二次大戦以前から普及していたとしても，ペイントによる色彩効果は早くとも1950年代以降に流行したと推察される。実態としては油性ペイントの普及から考えると，1960年代以降に始まったと規定すべきである。

7.3. 菱形文様の種類

1）個別型（27）

連続しないで，菱形一つを個別に扱った意匠。

写真３，写真30，写真31，写真32，写真37，写真38
写真40，写真42，写真43，写真44，写真45，写真46
写真47，写真48，写真50，写真52，写真53，写真57
写真58，写真59，写真61，写真62，写真63，写真64
写真65，写真66，写真67

2）連菱型（20）

２連菱，３連菱のように重なりがっあって連続する意匠。

写真１，写真２，写真４，写真５，写真６，写真７
写真８，写真９，写真12，写真13，写真17，写真22
写真25，写真26，写真27，写真28，写真29，写真51
写真55，写真56

3）複合型（17）

他の文様と複合して一つの意匠を示す。

・円との複合

写真10，写真14，写真21，写真36，写真41

・隅入角との複合

写真16，写真18，写真20，写真23，写真33，写真34
写真35，写真54，写真60

・立方体との複合

写真15

・その他の文様との複合

写真39，写真49

上記の分類を通して見る限り，連菱と複合型は圧倒的に中国に多い。特に連環と連菱の複合型は中国しか認められず，伝統的な意匠として明・清時代から継承されていると位置づけることができる［注14］。ところが，隅入角と菱形の複合は，中国に加えウズベキスタン，イランでも一例あり，必ずしも中国に限った意匠ではない。このことからシルクロードを通して，中国と中央アジア，西アジアは，隅入角と菱形を複合する意匠観を近代以前から共有していた可能性がある。

7.4. 菱形文様を使用する意図

菱形文様を住宅正面の中心に用いる意図に関しては，短時間ではあるが各地で聞き取りを行った。結果としては中国の西安で，四方への広がりという一種の方位性を示すのではないかという指摘があった程度で，明確な意図は確認できなかった。

圧倒的に多かったのは，菱形は装飾の一つであって，特に具体的な深い意味はないという漠然とした見解である。つまり，明確な意図は持たないが，地域の伝統的な習慣で用いているというのが，菱形を使用する生活者の実態ということになる。

地域の伝統性として注目されるのは，カザフスタンからキルギスタン中部にかけて見られる住宅の四隅に菱形文様を施す習慣である。玄関に近い場所ではなく，四隅というあたりに，吉祥性や魔除けの表徴という意図を強く感じる。

中国の漢民族が菱形を使う場所は，玄関の周辺に集中している。一般の住宅では，玄関ドアに鍾馗や伝説的な武将を印刷した紙を貼ることが多い。こうした習慣は魔除けと考えて間違いない。また玄関周辺の壁には，吉祥に関連する画像や書を貼り付ける等，玄関周辺の場所に強い思い入れがある。

イスラム文化圏では，菱形文様を玄関だけに特定せず，住宅の側面に使用している場合がある。こうした使用方法は中国で見かけない。それでも菱形は魔除けというよりは，吉祥を四方から取り込むというイメージを与えている。簡単に言うと，菱形文様は生活に縁起のよい装飾ということになろう。

菱形の成形は，職人による仕事と，家主による仕事の二種類がある。前者の代表的なものが人造石洗い出しによるもので，注文する家主と相談することも多く，同一地域では似たような意匠は極力避ける傾向がある。

中国の甘粛省や新疆ウイグル自治区においては，国家の政策で意図的に学校等の公共施設に連環と連菱をモチーフにした意匠を施設の正面に配しており，漢民族による統治というイメージを恣意的に示している傾向が認められる。同様な傾向はチベット自治区においても認められ，中国全体の自治区で展開している可能性が高い。

7.5. まとめ

以上の類型化とその考察から，シルクロード調査における菱形文様の使用については次のようにまとめることができる。

①菱形文様の使用率は中国が圧倒的に高い。中央アジア，西アジア，ブルガリアにおいても少数認められる。

②菱形文様の使用は住宅正面の壁面，ドアに集中している。中国においては日常の生活品にまで及んでいる。

③菱形文様を成形する技法は多様である。その中で，特に人造石洗い出しに関しては，中国からブルガリアまで共通しており，1970年以降に広域で流行したと考えられる。

④菱形文様のルーツに関しては今後の課題とするが，中国では連環と複合して清代以前から用いられている。また隅入角との複合に関しては中国，ウズベキスタン，イランで認められ，中国に限った意匠ではないことが明らかになった。

⑤菱形文様と生活のかかわりにに関しては，特に明確な目的を持っているわけではなく，地域の伝統的な習慣と近年の傾向から，家主と施工する職人が話し合って決めている。中国の公共施設では，意図的に菱形文様を用いて民族性を示している。

今後の課題として，アジア各地で見られるモルタル壁，鉄製門扉，木製玄関ドアが普及する以前の生活文化を掘り起こし，過去にどの程度菱形文様を生活に取り込んでいたかを明らかにしなければならない。そのためには，現在漠然としている菱形文様の使用意図に対して，海外の研究者との交流を通して，具体的な要因を抽出する必要がある。

注

1）石村真一：菱形文様と生活のかかわりに関する研究，芸術工学研究No.4，pp.69-83，2001

2）河南省，山西省，陝西省，甘粛省の黄土高原地域に見られる横穴式の住宅

3）前掲1）：pp.77-78

4）ドイツ人のフリードリヒ・ホフマンが1858年に特許を得た窯で，リング・キルン（輪窯）と呼ばれている。

5）石井香久子氏提供

6）中国の各省内の行政は市の単位である。但し，この場合の市は広域を指し，甘粛省酒泉市の中に敦煌市，玉門市等の小さな市が含まれている。

7）中国の地名表示は，すべて漢字，またはすべてカタカナが望ましいが，新彊ウイグル自治区の地名は漢字表記が難しいことから，便宜上カタカナ表記とした。

8）西域のイメージをイスラム風と規定することは性急という指摘もあろう。特に敦煌等の発掘で仏教遺跡が現在散見されるため，観光客の中には古い仏教思想の継承もあるのではないかという考えを持つ人もいるかもしれないが，現在のウイグル族や回族に仏教信仰は認められない。中央アジアに近いイスラム文化をイメージするのが妥当と思われることから，敢えてイスラム風と規定した。

9）前掲1）：p.77

10）前掲1）：p.77

11）中国政府はイスラム教徒に関して，公共の仕事に就く際，信仰の自由を現在一部規制している。すなわち，公務中にはイスラム信仰を公然と示すことを禁じている。近年はウイグル族を中心とする独立運動も盛んで，暴動騒ぎも多発している。

12）前掲1）：p.81

13）前掲1）：pp.77-78

14）前掲1）：p.80,82

写真１　人造石洗い出しによる菱形
（河南省洛陽市郊外）

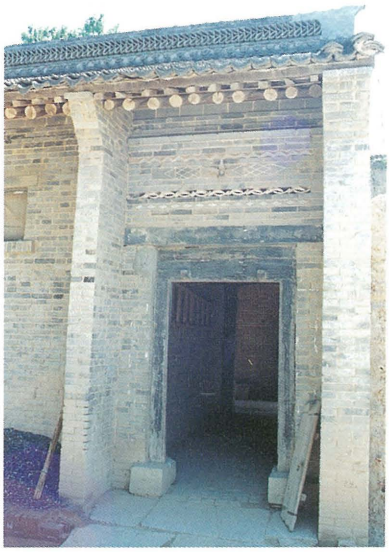

写真４　煉瓦に彫られた菱形
（陝西省西安市郊外）

写真２　人造石洗い出しによる菱形
（陝西省西安市郊外）

写真５　人造石洗い出しによる菱形
（甘粛省定西地区）

写真３　木製レリーフによる菱形
（陝西省西安市）

写真６　ブロックにレリーフされた菱形
（甘粛省武威市）

写真７　人造石洗い出しによる菱形
（甘粛省武威市郊外）

写真10　モルタルの掻き落としによる菱形
（甘粛省張掖市郊外）

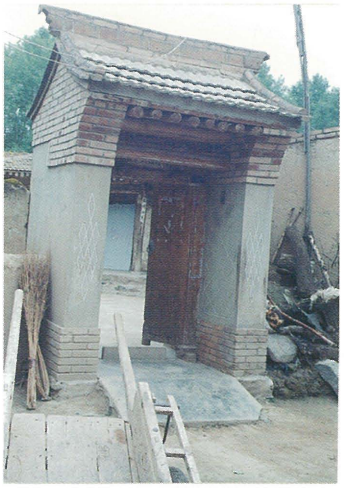

写真８　モルタルの溝に着色した菱形
（甘粛省武威市郊外）

写真11　木材による伝統的な菱形
（江蘇省蘇州市）

写真９　人造石洗い出しによる菱形
（甘粛省武威市郊外）

写真12　ペイントによる菱形
（甘粛省玉門市郊外）

写真13　鉄による菱形
（甘粛省酒泉市安西）

写真16　人造石洗い出しによる菱形
（甘粛省敦煌市）

写真14　ペイントによる菱形
（甘粛省敦煌市郊外）

写真17　人造石洗い出しによる菱形
（甘粛省敦煌市郊外）

写真15　人造石洗い出しによる菱形
（甘粛省敦煌市）

写真18　ペイントによる菱形
（甘粛省玉門市郊外）

写真19　タイル絵
（甘粛省敦煌市郊外）

写真20　人造石洗い出しによる菱形
（新疆ウイグル自治区ハミ市）

写真21　ペイントによる菱形
（新疆ウイグル自治区ハミ市郊外）

写真22　タイルの模様にした菱形
（新疆ウイグル自治区市）

写真23　レリーフにペイントした菱形
（新疆ウイグル自治区トルファン市）

写真24　人造石洗い出しによる菱形
（新疆ウイグル自治区ウルムチ市郊外）

写真25　人造石洗い出しによる菱形
（新疆ウイグル自治区ウルムチ市郊外）

写真26　プリントによる菱形
（新疆ウイグル自治区クチャ市郊外）

写真27　ガラス表面にシールで加工した菱形
（新疆ウイグル自治区アクス市）

写真28　プラスチックのレリーフによる菱形
（新疆ウイグル自治区アクス市）

写真29　人造石洗い出しによる菱形
（新疆ウイグル自治区アクス市）

写真30　タイルによる菱形
（新疆ウイグル自治区アクス市）

写真31　木のレリーフによる菱形
（新疆ウイグル自治区アクス市）

写真32　ペイントによる菱形
（新疆ウイグル自治区カシュガル市）

写真33　木のレリーフによる菱形
（新疆ウイグル自治区カシュガル市）

写真34　木のレリーフによる菱形
（新疆ウイグル自治区カシュガル市）

写真35　人造石洗い出しによる菱形
（新疆ウイグル自治区カシュガル市）

写真36　鉄による菱形
（新疆ウイグル自治区カシュガル市郊外）

写真37　タイルによる菱形
（新彊ウイグル自治区カシュガル市）

写真40　人造石洗い出しによる菱形
（ギルギスタンのビシュケク市郊外）

写真38　ペイントによる菱形
（カザフスタンのゲオルギエフスカ近郊）

写真41　漆喰による菱形
（ギルギスタンのビシュケク市郊外）

写真39　ペイントによる菱形
（カザフスタンのゲオルギエフスカ近郊）

写真42　木のレリーフによる菱形
（ギルギスタンのビシュケク市郊外）

写真43　人造石洗い出しによる菱形
（キルギスタンのトクトグル近郊）

写真46　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのフェルガナ市郊外）

写真44　モルタルのレリーフによる菱形
（キルギスタンのオシ市郊外）

写真47　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのタシケント市）

写真45　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのフェルガナ市郊外）

写真48　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのシザフ付近）

写真49　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのシザフ付近）

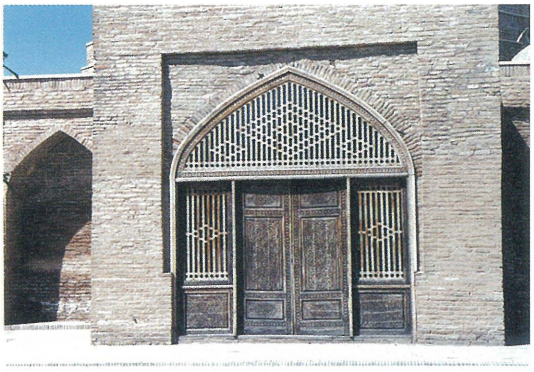

写真52　木の組み合わせによる菱形
（ウズベキスタンのシャーリサブス）

写真50　木のレリーフによる菱形
（ウズベキスタンのサマルカンド市郊外）

写真53　木のレリーフによる菱形
（ウズベキスタンのブハラ市）

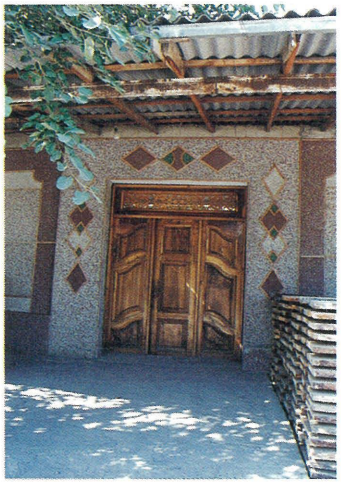

写真51　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのサマルカンド市郊外）

写真54　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのブハラ市）

写真55　人造石洗い出しによる菱形
（ウズベキスタンのブハラ市）

写真58　鉄のレリーフによる菱形
（イランのマシュハド市郊外）

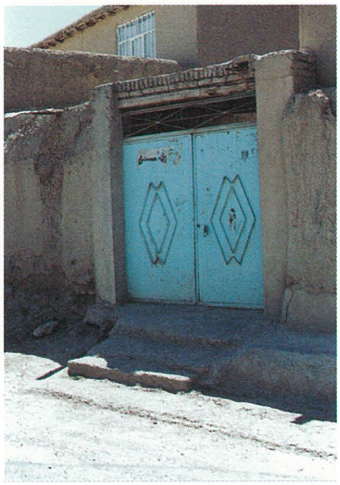

写真56　鉄のレリーフによる菱形
（イランのコッペ山脈の村）

写真59　鉄のレリーフによる菱形
（イランのマシュハド市郊外）

写真57　鉄のレリーフによる菱形
（イランのコッペ山脈の村）

写真60　鉄のレリーフによる菱形
（イランのサーリー市）

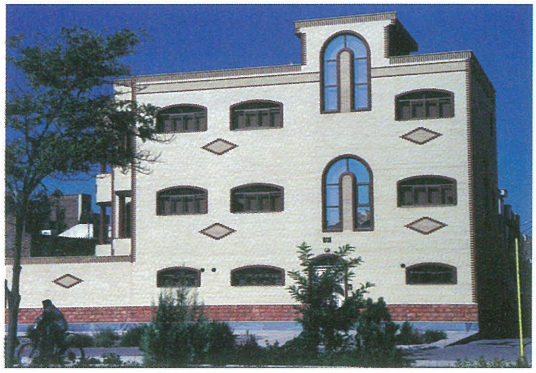

写真61　タイルによる菱形
（イランのタブリーズ市）

写真64　木のレリーフによる菱形
（トルコのアルダハン）

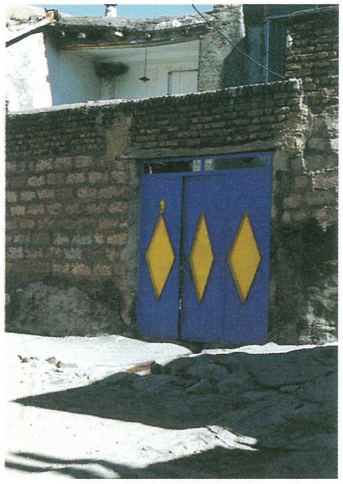

写真62　鉄のレリーフによる菱形
（イランのタブリーズ市）

写真65　木のレリーフによる菱形
（トルコのアルダハン）

写真63　人造石洗い出しによる菱形
（イランのタブリーズ市）

写真66　木のレリーフによる菱形
（トルコのアルトウィン郊外）

写真67　人造石洗い出しによる菱形
（ブルガリアのハスコバ市）

写真68　人造石洗い出しによる菱形
（大分県日田市）